

「わたしを束ねないで」 新川和江さんの詩に考える精神的な自由と身体的な言葉

1か月弱の夏休みが終わり21日より学校活動が再開しました。補習、クラブ活動、大会、遠征など充実した暑く熱い夏を過ごせたのではと推察します。学校は9月11日開催の合唱コンクールに向け本日より練習会場が割り当てられ文化の秋がいよいよやってくる、そんな季節となります。先日、詩人の新川和江さんが惜しくもお亡くなりになりました。国語の授業でも扱われる詩人ですが私は合唱界で新川さんの詩に作曲された曲を数多く歌い、女性としても一人間としても共感できる部分を多く持った作品の数々に出逢いました。新川さんの「精神的な自由と身体的な言葉が通じ合う詩」は、外から求められる肩書の自分と、内から感じているありのままの自分の葛藤、この視点が人々に共感をもたらす新鮮な作品ではないかと感じます(mahoblog.com 引用)代表的作品の「わたしを束ねないで」をあらためて読みます。「自分らしさを取り戻すために自分の本質によびかけている」との解釈があるように皆さんの心にもきっと深く染み入るのではないのでしょうか。新川さんの作品をあらためて鑑賞したいと思う初秋です。謹んでご冥福をお祈りいたします

8月23日「ワックスがけ」を前に、こんなにも美しく雑巾がけ生徒たちが古い校舎をピカピカに磨いてくれています



8月16日と17日の夜、火災を知らせる放送機器の故障により近隣の皆様には多大なるご迷惑をおかけいたしました心よりお詫び申し上げます。現在業者による機器の交換を依頼しています。誠に申し訳ありませんでした

わたしを束ねないで

新川和江

わたしを束(たば)ねないで
あらせいとうの花のように
白い葱(ねぎ)のように
束ねないでください わたしは稲穂(いなほ)
秋 大地が胸を焦がす
見渡すかぎりの金色(こんじき)の稲穂

わたしを止めないで
標本箱の昆虫のように
高原からきた絵葉書のように
止めないでください わたしは羽撃(はばた)き
こやみなく空のひろさをかいさぐっている
目には見えないつばさの音

わたしを注(つ)がないで
日常性に薄められた牛乳のように
ぬるい酒のように
注がないでください わたしは海
夜 とほうもなく満ちてくる
苦い潮(うしお) ふちのない水

わたしを名付けないで
娘という名 妻という名
重々しい母という名でしつらえた座に
座りきりにさせないでください わたしは風
りんごの木と
泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで
, (コンマ)や . (ピリオド)いくつかの段落
そしておしまいに「さようなら」があったりする手紙のように
こまめにけりをつけないでください わたしは終りのない文章
川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の詩

—詩集『比喩でなく』